日本医史学雑誌第三十八巻第一号
平成四年一月三十日発行
平成三年十月二十八日受付

北陸地域の医学史

多留淳文

一、緒　言

北陸には一九七九（昭和五十四年）に発足した北陸医史学同好会（日本医史学会北陸支部）がある。年一回の学術集会と機関紙『北陸医史』を持ち、発表された内容は北陸地域の医学史に関する重要事項が網羅されている。

ここで北陸とは、富山・石川・福井の三県を指す。各県別に医学史を纒めたモノグラフは出来ているが、北陸という地域を包括した綜説は未だみられない。古来、北陸三県は互いに関連が深く、現行行政上の県単位で独立した医学史を作り上げることは困難である。北陸共通の医学史の必要性を痛感しながら、三十年前から調査を進めてきたところ、近年、北陸における藩末維新期の医跡を探訪し、医史学諸先達の膨大な報文を通覧するようになって、北陸医史学の全体像や課題が朧気ながら見えてきた。北陸地域の医学史を綜説するなど、浅学不才の私には任務が重すぎるが、今後の北陸医史学発展のための一里標になれば幸いと考え、あえて報告する次第である。

二、北陸の地域性と医史研究法

北陸という名称の由来は、『続日本紀』七九七（延暦十六年）に初見する北陸道（ホクロクドウ）である。古くはコシ（高

志・越）と呼ばれた北陸は今の新潟県や山形県の一部に亘る地域であったが、行政地域区分も幾多の変遷をみて、現在の富山・石川・福井の三県となった。**表1**に示すように、北陸の古代では今の石川県は越前国の一部であったし、近世における金沢藩（俗称の加賀藩）は今の富山県に及ぶ領域であった。明治の一時期には、石川県が越前の福井県を包括したこともあった。史的に考究するには、対象として北陸という地域が必要な所以である。

地理的にみても、北陸は共通の地域性を持っている。地域特性を基盤に医学史が展開されるから、要点だけ記して置こう。第一は、明治維新以前の政治文化の中心であった近畿圏に隣接する地域である。距離的には近いが、丹波高地や伊吹山地に隔てられ、交通が不便であった。近いが不便という矛盾が北陸医学史を特徴づける第一の要因となっている。

第二は、日本海に面する地域である。現在は裏日本と呼ばれるが、かつてはアジヤ大陸文化渡来の表玄関であった。対馬海流とリマン海流の交叉点として、出雲文化圏と同じ意義を持つ。

第三は、平野地形と多雪気候による豊かな生産性である。北陸は山陰の出雲文化圏に対して気多文化圏といわれる。気とは米を意味し、物産力を物語る。北陸は山陰と異なり、広大な平野と白山・立山に代表される山岳がある。この山岳の積雪のために河況係数（最小流量と最大流量の比）が小さく、いわゆる表日本の河川に比べて安定した生産が出来る。北陸は曇り空が多く暗いイメージが強いが、近代工業発達以前は実に恵まれた風土であった。

北陸の医史研究法は、基本的な歴史学研究法である史料・批判・綜合によることは変らないが、日本または世界の一地域の医学の歴史である点、地域事跡の単なる羅列に止まらず、他の地域から受けた恩恵と他の地域に与えた影響の観点で地域特性を明らかにしたいと考える。

幸い、北陸の中核都市金沢は戦災を免れ、膨大な文書資料が現存している。とりわけ、金沢市立図書館は「天下の書府」といわれた藩政期から蒐集された文書の宝庫である。医家の伝記が不明でも、著書から調査の端緒を見出すことが出来ることもある。また各戸の氏名入りの古地図によって初めて知った医家もある。その間にあって、近世北陸の医学史に

表1　北陸地域区分の推移

時代	年代		北陸					関東・甲信越	
	西暦	元号	若狭	越前	加賀	能登	越中	越後	佐渡
			北陸道（旧名、高志または越）	北陸道（旧名、高志または越）	北陸道（旧名、高志または越）	北陸道（旧名、高志または越）	北陸道（旧名、高志または越）	北陸道（旧名、高志または越）	北陸道（旧名、高志または越）
飛鳥	七〇三	大宝三	若狭	越前	越前	越前	越中	越後	佐渡
奈良	七一八	養老二	若狭	越前	越前	能登	越中	越後	佐渡
奈良	七四一	天平十三	若狭	越前	越前	越中	越中	越後	佐渡
平安	八二三／一一八五	弘仁十四／文治元	若狭	越前	加賀	能登	越中	越後	佐渡
江戸	一六〇〇	慶長五	小浜藩	福井藩	金沢藩（加賀藩）	金沢藩（加賀藩）	金沢藩（加賀藩）	（新潟諸藩）	佐渡
江戸	一六三九	寛永十六	小浜藩	（福井諸県）	大聖寺藩 / 金沢藩（加賀藩）	金沢藩（加賀藩）	富山藩 / 金沢藩（加賀藩）	（新潟諸藩）	佐渡
明治	一八七一	明治四	小浜県	（福井諸藩）	大聖寺県 / 金沢県（石川県）	金沢県（石川県）	富山県 / 金沢県	（新潟諸県）	佐渡県
明治	一八七一	明治四	小浜県	（福井諸藩）	石川県	七尾県	富山県 / 金沢県	新潟県 / 柏崎県	相川県
明治	一八七二	明治五	滋賀県	滋賀県 / 福井県	石川県	七尾県	新川県（魚津）	新潟県 / 柏崎県	相川県
明治	一八七二	明治五	敦賀県	敦賀県	石川県	石川県	新川県（魚津）	新潟県	相川県
明治	一八七六	明治九	滋賀県	滋賀県 / 石川県	石川県	石川県	石川県	新潟県	新潟県
明治	一八七八	明治十一	敦賀県	敦賀県 / 福井県	石川県	石川県	石川県	新潟県	新潟県
明治	一八八一	明治十四	福井県	福井県	石川県	石川県	富山県	新潟県	新潟県

関する第一級資料は、『侍帳』（『分限帳』『武鑑』）と『先祖由緒并一類附帳』であり、これらをもとに、現地探訪を行った。現地探訪は、墓所・社寺・旧宅などの遺跡のほか、後裔について史料を求めた。地域の医史研究の特徴は、身近かに居住する者の地の利であるとも言っても過言でない。

過去は未来永却に不変なものとして価値ある事跡を追求すべきだが、この北陸でも明治・大正の史料さえ散佚し不明なことが多く、今後の早急な調査が望まれることである。

研究に当って、北陸地域以外の医学史書や医史学関係の文献および北陸地域内の郷土史関係の諸書、とりわけ郡・市・町・村史や辞典などを参考にしたが、一々の記載は省略した。

三、原始・古代——土着と渡来

西暦紀元前の北陸の医学は、日本各地と同様に未だ先史・神話の時代または縄文式文化期であり、世界文明の発祥地オリエント・インド・中国のような医学古典はみられない。北陸は近年まで考古学的調査も遅れていたが、最近の発掘成績は目覚しく、例えば金沢市新保本町のチカモリ遺跡などの出土品は北陸の豊かな生産性を物語っている。それにつけても北陸考古学で最大の業績を残したのは福井県小浜市出身の上田三平[註(一)]（一八八一～一九五〇）であるが、彼はまた名著『日本薬園史の研究』があり、医史学的功績も忘れてはならない。

「魏志倭人伝」（『三国志』）や『古事記』『日本書紀』などの奈良時代以前の史書には、北陸の医学史に直接関係のある記事は見当らないが、大陸からの渡来や文化の表玄関であったことが窺える。また、継体天皇の越前出身説・白山を開いた泰澄の山岳信仰医療伝説・『万葉集』の大伴家持の事跡も興味深い。

文書に現れた北陸の医史的記録の最初は、『続日本紀』に「和銅二年（七〇九）六月甲午、上総、越中二国疫、薬を給し之を療す」とある。次いで天平九年（七三七）に全国に疫病が大流行し、大政官は北陸等六道の諸国司に対して、疫病（天

然痘）の治療法および禁食物等について七カ条[註(一)]を下した。このことは既に富士川游『日本疾病史』日本医書出版、一九四四（昭和十九年）や服部敏良『奈良時代の医学』東京堂、一九四五（昭和二十年）にも記述されているように、疾病史に基づく治療史または医療制度史から医家を見直す必要を示していると思われる。

当時、北陸では灸治療も盛んに行われたらしい。『正倉院文書』の「越前国江沼郡山背郷天平十二年計帳」（七四〇）に、調庸の人足を識別するために疵や黒子だけでなく、灸痕を用いたことが克明に記されて居り、灸療法は大陸から早い時期に渡来していたと推定される。同じく『正倉院文書』そして『東南院文書』に、天平勝宝六年（七五四）から天平神護二年（七六六）まで越前見国医師として従八位上の六人部東人が派遣されたと記されている。この記事は北陸最初の医師であるが、治療は主に読経や加持祈禱であったらしい。

延暦十三年（七九四）、首都は現在の京都に移り、約四〇〇年間の平安時代に入る。まず、『日本後紀』（八四〇）によれば、日本最古の『大同類聚方』（八〇八）が勅撰で編纂された。しかし、現在するものは近世後期の写本で偽書であっても、記載されている内容を調べてみると、当時全国各地の神社・仏寺・豪族などに伝えられている生薬や処方が克明に記録されているので、北陸に関するものを逐一拾ってみた。その結果、いままで全く不明であった北陸古代の医療の片鱗を窺う可能性を見出したのである。結論は慎重を要するが、北陸の在来原住民の医療を民俗学的に検討する重要資料であることは間違いない。たしかに用薬の部に加賀とあったり、中国の生薬や処方が出てくるから問題がないわけではないが、医史学的に冷静な考察をするならば、明治維新の近代化によって漢方が西洋医学と交替した事情と似て、土着の伝統的な日本医学（和方）は中国大陸から渡来した優秀な医学を受容するために弾圧されたと考えられないこともない。従来から最良の底本とされる畠山本は北陸能登七尾城主畠山義範所伝本[註(二)]であるし、金沢市立図書館所蔵の『松雲公採集遺編纂』中に『大同類聚方』が含まれている等、今後の検討が待たれる。

『大同類聚方』所載の北陸関係薬物

越中国

○宇度支（巻之四、用薬類、木類部）

○都無川牟之（巻之十一、用薬類之十一、虫類部）

能登国

○握手薬、羽咋郡鎌田勝田方（巻之一百、爾和可奈於牟）

加賀国

○加母（巻之十三、用薬類、獣類部）

越前国

○波々久利（巻之一、用薬類、山草部）

○於保毛之薬、丹生郡大虫神社伝方（巻之十七、乃無度加世也民）

○越薬、角鹿□等家□所秘乃方（巻之二十、比衣也万比）

○越薬、角鹿郡筒飯神社方（同右）

○坂比薬、坂北郡細道方（巻之二十一、美比衣也美）

○安味薬　丹生郡安味□□乃家爾伝而里人用流乃方（巻之二十二、波支古紀也美）

○今立薬、今立郡県主方（巻之二十四、宇豆介也美）

○倍乃地見久須利（命満薬）、角鹿笥飯乃神社爾所伝乃方（巻之二十八、牟奈加依利也美）

○水向薬、足羽郡御看幸渡方（巻之三十、牟奈保久良以太美也美）

○坂井久須利、坂井郡海辺部之里人乃家乃方（巻之三十一、波良古波利也美）

○乃母里薬、角鹿国角鹿津久麻呂乃方（巻之三十九、久留比也民）

○井乃上薬、角鹿笥飯社乃宮造乃家爾相伝乃薬方也（巻之六十七、之多乃也末比）
○足羽薬、足羽郡主岑松方（巻之七十、之良知也味並奈加知）
○山田薬、[榊囲]郡山田麻呂等家爾伝天其里人乃常爾用而験安里（巻之八十五、宇美豆久利久差）
○反寸美付薬、榊田郡山田麻呂之方（巻之八十八、返須民加差）
○豆女薬、丹生郡安和長善方（巻之九十二、古不禰也美）
○葉蛆薬、南条郡野波供手方（巻之九十三、血波之利）
○焚出薬、今立郡刈倉磨主方（巻之九十五、保禰之波利也美）
○白霧薬、榊田郡樺山直敬方（巻之一百、禰古加美也美）
○井神薬、坂北郡細道盛陸方（巻之一百、以止介衣比也美）
○煽火薬、古志郡邑智定禎方（巻之一百、不由古々衣也美）

若狭国

○佐分薬、遠敷郡□乃家方（巻之二十一、奈川介也美）
○左和介薬、遠敷郡佐分方（同右）以上

北陸古代の薬物について信頼のおける史料は『延喜式』（九二七完成、九六七施行）の巻三十七「典薬寮、諸国進年料雑薬」の記録といわれる。

『延喜式』所載の北陸関係薬物

若狭国廿四種

人参三斤、黄菊花二両、茯苓四斤、桔梗、漏蘆、杜仲、芍薬各二斤、枳実十斤、竜胆、白薇各一斤、沢瀉六両、続断四両、狗脊十四斤、榛皮廿九斤、玄参一斤二両、葛花三両、榧子二斗、麦門冬、車前子、呉茱萸、蜀椒各二斗、桃仁

八升、蔓荆子三升、黄樊石一斗

越前国十八種

黄連五十七斤、独活四斤、牛膝十七斤、桔梗六斤、白朮五斤三両、菖蒲廿六斤、人参十四斤、僕奈四斤、細辛五斤、大黄廿六斤、升麻六斤、夜干廿斤、黄精十二両、榧子一斗六升、薯蕷二斗、桃仁七升五合、兎糸子四升、蜀椒二斗七升

加賀国七種

黄連七斤、枳実、茯苓各一斤、芎藭卅斤、藍漆十三両、干地黄四斤十一両、薯蕷一斗

能登国五種

黄連三斤、榧子四斗、薯蕷一斗、桃仁二升、蜀椒三斗

越中国十六種

白朮、白芷各十一斤、藍漆、大黄各五斤、苦参、夜干各十斤、黄耆三斤、榧子五升、薯蕷二斗九升、桃仁六升、附子三斗、蜀椒四升、甘葛煎三升、獺肝二具、熊胆四具、羚羊角四具

『延喜式』に所載の薬物は、大部分が中国伝来の漢方で使われるもので、中国産と同じものかどうか疑しいものもある。国産の代用品か中国からの輸入品かもしれないが、平安人の探薬の努力には敬意を表したい。

北陸の平安時代に関して特記すべきは、わが国に現存する最古の医書『医心方』半井本の紙背文書が近年発見されたことである。『医心方』は、漢王朝の帰化人の後裔で、鍼博士・丹波介の丹波康頼が九八四（永観二年）に撰録し、朝廷に献上したものである。丹波氏の子孫は典薬頭に昇進するが、後裔は多岐に分れ、多紀家（金保家）は江戸医学館を主宰して有名である。ほかに錦小路家・小森家・親康家・施薬院家・丹家がある。直系の小森典薬頭は一時期、越前に居住したと、小森家の門人で加賀出身の坂井豊作『鍼術秘要』[註(四)]の序文にある。越前の丹波氏小森家については未だほとんどわかってい

ない。

ところで、『医心方』は室町時代に正親天皇から時の典薬頭半井光成に下賜され、全く数奇な経過[註五]を辿って、遂には一九八二（昭和五十七年）文化庁に移管され、翌々年に国宝に指定されることになる。幻の書といわれた『医心方』半井家本は文化庁係官が調査の結果、その料紙は北陸から京都へ差出された連絡文書であった。『医心方』紙背文書は北陸の古代史料として特級の評価がなされただけでなく、その経緯をめぐって『医心方』成立の謎を解く重要な鍵の一つとされるようになった。また当時、紙は極めて貴重な品であったが、越前和紙は古来高級品といわれ、福井県今立郡今立町の特産物となっている。

一方、『医心方』半井本の半井家は、垂仁天皇を祖とする和気清磨の子孫で、和気家は丹羽氏より古くから典薬頭であった。平安時代以来、日本の宮廷皇室の医療は、和気（半井）家と丹波（多紀）家の二本立てであった。半井家と丹波家の間には婚姻関係もあり、北陸と半井氏の関係も重要である。高瀬富山大学名誉教授（日本史）は、日本古代史における和気氏の果した役割は大きく、平安時代の山岳仏教や薬師信仰、薬壺の秘密に注目しなければならないとしている[註六]。『福井県医学史』や『京都の医学史』には半井家と北陸の関係が詳述されている。北陸越前半井家の祖は岡本為竹という。福井藩医最高禄の岡本為竹は二代目であろう。同家からは近松門左衛門・岡本一抱の兄弟を輩出しただけでなく、明治期は京都医師会長など近代医学に貢献した医家もある。北陸の医史学上、最も重要な家系と思われるが、諸書の記載はまちまちで理解しにくい。よって系譜で示してみた（図1）。ほとんどが近世以後の活躍であるが半井家に関することなので、敢えて古代に記載した。

ここで重要なことは、典薬頭半井・丹波の両家が越前の医療に大きなかかわりがあったことと、浄瑠璃作家の近松門左衛門は別としても、岡本一抱[註七]が京都に出て膨大な医書を著作したことである。岡本一抱の著書は四十種を越え、大部分が主要な中国医書の諺解（術語の解説書）であり、兄近松門左衛門から「読者が原典を読まなくなり、世を惑わす」と叱責を

図 1　岡本家と半井家のかかわり

岡本宗受（吉園）
- 山城国加茂神社侍
- 半井瑞寿（驢庵）門下
- 豊臣秀吉家臣，法印

岡本為竹
＝杉森信義（受慶）①
- 半井瑞寿門下
- 松平忠昌家臣，法眼
- 越後高田 → 越前吉江
- 京都（1668）

- 長男　相国寺宗長
- 次男　杉森信盛　＝近松門左衛門
- 三男　岡本一抱子（知庵）　味岡三伯門下③
- 娘　錦江　大阪・俳人
- 快庵　夭逝
- 長女　○○○○○
- 養子　半井瑞宝　＝岡本為竹②　半井黙真　半井瑞寿の孫　福井藩医七〇〇石（一六五六）　養子

半井為竹（瑞庵）④
- 福井藩主粕谷伝左衛門 二男

半井仲庵（元仲・南陽・晩香）⑨
- 江戸医学所講師，ボンペ・松本良順門下
- 明治3年大阪歿，墓福井足羽山

半井澄（元瑞・秋山）⑩
- 松本良順門下，大学東校教官
- 京都医会長，明治19年歿

半井朴 ⑪
- ドイツ留学，京都で始めてレントゲン

受けたエピソードは有名であるが、漢方医学の啓蒙に果した役割は計り知れないものがある。このほか一七六九（明和六年）に福井の明里で解剖を行った半井彦や、加賀半井家の詳細は不明である。

平安後期の説話文学『今昔物語集』（一一二〇ごろ）には医学記事が多い。[註(八)] 専門医学書でないが、一般大衆が医療をどう受けとめていたかを知る上で価値がある。北陸に関するものでは、巻第二十六、本朝付宿報、能登国鳳至孫得帯語第十二に犀角漂着の伝説が載っている。今でも、犀角・鹿茸・玲羊角など中国人憧憬の高貴薬である。奈良春日山の鹿が神格化されたのも頷づける。能登鳳至の孫（フギシのウマゴ、ヒコ）伝承の犀角は密輸入品か代用品のカモシカの角であった可能性が強い。また、この説話にも陰陽師が登場している。陰陽師や呪術師は、古代宮廷の中だけでなく、能登半島の僻地まで広く活躍していたことを物語るものといえよう。

四、中世武家宗教社会の北陸医学

戦乱の中世は、軍陣外科（金瘡医）と新興仏教・僧医の隆盛をみる。

わが国の金瘡（創）医に、神保・吉益・中条・赤井・永井・板倉・板坂・大野など多数の流派があったことが、岡崎桂一郎『本邦外科史』（一九一四年刊、著者は金沢医専出身、富士川游の協力者）などによって知ることができる。[註(九)] 加藤豊明氏によれば、これらの諸流のうちで最も著名かつ諸派の源流とみなされるものは、越中の神保氏が創始したと伝えられる神保流金瘡療治であるという。その具体的内容は、湯浅等雲軒『若州西津湯浅方流疵薬方』（武生市立図書館蔵）にみられるが、最初は畠山播磨守祐盛が秘伝したものを神保越中守が相伝し、越中新川の神保孫左衛門がさらに工夫して一流を立てたといわれる。能登・越中・河内・紀伊の守護大名となった畠山氏や神保氏らの変転は、『太平記』さながらに複雑を極める。

一つ指摘して置きたいのは、江戸時代古方の名医吉益東洞の祖父・金瘡医吉益半笑斉が畠山氏の出身であることである。日本医学のルネッサンスといわれる実証主義者吉益東洞の出現は、外科的発想だと思えてならない。吉益東洞の直系

は吉益北洲は弘化二年（一八四五）金沢藩医となり、北陸三県に偉大な足跡を残した。

能登七尾城主畠山氏は室町時代初期の天文年間（一五三二―一五五五）に朝廷医竹田定珪を招き、牛黄円が北陸一帯に広まる契機をつくったり、永禄十一年（一五六八）には日本医学中興の祖・曲直瀬道三から医学と処世術の伝授[註(一〇)]を受けたという。曲直瀬道三は天正十二年（一五八四）、キリスト教に入信するが、キリシタン大名高山右近は天正十七年（一五八九）初代金沢藩主前田利家から三万石で招かれる。曲直瀬道三の長女と縁組した曲直瀬玄朔（今大路系）の娘を妻とした曲直瀬正淋（養安院系）は、宇喜多秀家に嫁いだ前田利家の娘豪姫の奇病を文禄四年（一五九五）に治したことから、金沢藩は曲直瀬道三の次女と縁組した正純（亨徳院系）の五代玄与以後、合力米協力者として招かれたほか、もう一つの系累が金沢の郊外に現住して居られる。[註(一一)]

キリスト教伝来に伴い、南蛮流の外科が輸入され、その先駆者は栗崎道喜[註(一二)(一三)]（一五六八―一六五一）である。初代道喜は肥後（熊本県）出身であるが、長崎で開業後、元和元年（一六一五）には江戸幕府御役医師となった。越前、六代福井藩主松平綱昌に招かれて藩医となった栗崎道喜正勝は二代目である。後裔は現在薬種商を営まれるという。

安土桃山時代、キリスト教の伝来は、近世末のオランダ医学以前に、ヨーロッパ近代医学の渡来という意味で注目しなければならないが、わが国の中世医学を特徴づけるのは、戦乱の時代の不安を救う新興謙倉仏教の台頭である。その指導者たちは挙って布教の重点地盤を北陸に求めた。越前に永平寺を開いた道元の曹洞宗、蓮如・顕如らの浄土真宗、能登に大本山妙成寺を建てた日蓮宗など、北陸は仏教王国の観を呈し、現代に及んでいる。当時は僧医が医療を主ったから、北陸中世の医療レベルは全国的にみても高かったと思われる。

越前一帯を支配した朝倉氏の僧医谷野一柏の事蹟は著明である。朝倉氏については福井県一乗谷の遺跡が近年発掘され、中世武家の典型を詳細に知ることができるようになった。出土品には『湯液本草』の焼片も発見されたが、朝倉孝景の命で出版された『勿聴子俗解八十一難経』の版木[註(一四)]が敦賀市西郊の西福寺に現存することは注目に値する。この版木は、

阿佐井野版『医書大全』（一五二八年）に次いで、天文五年（一五三六）日本で二番目の医書印刷に使われたものである。この出版を担当したのが谷野一柏（生没不詳）で、もと南部僧、渡明して医学を修めた。孝景の招きで享禄二年（一五二七）に一乗谷に移住し、還俗して雲庵と改めた。一柏は号である。医の門下に三崎安指が居り、後裔は福井市内で現在開業されている。この間の事情は岩治・小曽戸・真柳の諸氏の報文に詳しい。天正二年（一五七四）、後の金沢藩初代藩主前田利家に口科医として仕えた江間竹林坊（最初の金沢藩医）も越前朝倉の遺臣であった。藩政期末、江間家は本道と口科に分れるが、代々医業が受継がれ、奇しくも御子孫の江間富喜子氏[註一五]は拙宅の近所に現住である。

日本最初の活字版医書『十四経発揮』を慶長元年（一五九六）に出版した小瀬甫庵[註一六]も北陸と関係が深い。甫庵（一五五四―一六四〇）は名を道喜といい尾張の医者で、豊臣秀次の侍医でもあった。豊臣滅亡後、出雲・播磨・京都と流浪、京都では曲直瀬道三の啓迪院で学んだといわれる。甫庵最大の功績は『信長記』『太閤記』などの大著をあらわしただけでなく、日本で初めて古活字版医書を多数出版し、近世日本医学の普及に著明な役割を果したことである。寛永元年（一六二四）実子坂井就安の招寄で金沢藩に出仕し藩医・書物奉行となり二百五十石を拝領、世嗣（第二代前田利常）に軍法などを伝受した。小瀬・坂井両家の系譜は明治三年（一八七〇）後裔小瀬来吉提出の『先祖由緒書』（金沢市立図書館蔵）によって詳細に辿ることができる。

五、近世――幕藩鎖国体制下の展開

慶長五年（一六〇〇）、関が原の戦を最期に徳川家康は天下を統一、江戸に幕府を開いた。爾来二六七年間の近世は国内に参勤交替など幕藩体制、国外には鎖国令を敷いたため、日本独自の文化が展開することになる。北陸の近世医学史は絢爛たるものであり、医史学諸先達の報文も多数みられる。

北陸諸藩の初期はいずれも藩外から医師を招き、藩医も少数であった。例えば金沢藩では、江間竹林坊・曲直瀬正淋に

ついては既に述べたが、このほかでは山科長安（一六四一―一六八八、京都、小児科）、大石玄哲・南保玄達[註(一七)]らの京阪の名医、慶長十六年（一六一一）に坂浄珍（幕医）・曽谷寿仙（一五四六―一六一四、京都、瘍科）、寛永十七年（一六四〇）には野間玄琢（一五九一―一六四五、曲直瀬玄朔門下、幕医）が金沢に来診した。富山藩は寛永十七年（一六四〇）に金沢藩から分封して創立したが、当初は金沢から移籍した興津里庵・村山意度・久保寿軒の三名に過ぎなかった。しかし、万治年間（一六五八―一六六一）の富山城下絵図には町医拝領地に永井良閑・滝寿兼・山蔵雲石・小野木長慶の名がみえるという（中川喜久江氏による）。藩創立期の模様は、明治維新期に外国人医師を雇入れたのに似ている。

金沢藩で最初に出仕した本道医は初代内山覚中といわれているが、詳細は不明である。慶長十年（一六〇五）『富山侍帳』に三百石、内山覚中とある。元和元年（一六一五）頃の侍帳には御薬師として、澄庵・沢田道才・理庵・道甫・慶安・道閑と内山覚中の名がみえる。寛永四年（一六二七）の侍帳では御薬師衆の項が独立して設けられ、三百石高田慶安・内山覚中以下、坂井就安・飛鳥井理庵・道閑・道可・津田宗意道甫・覚興・養軒・小林又右衛門・小林幸庵・名倉不乱・休庵の十四名が記されている。その後、藩体制の確立に伴い、藩医も整ってくる。

近世前期、北陸における藩医の状況を富山・金沢・福井の三藩について比較してみよう。藩医の名列を知る格好な資料は各種の『侍帳』（『分限帳』、『武鑑』とも呼ばれる）である。しかし藩ごとに記載の内容、時期が統一されて居らないため不便を感ずるが、一応、富山藩は貞享三年（一六八六）の『富山藩武鑑』、金沢藩は寛文十一年（一六七一）の『侍帳』、福井藩は貞享三年（一六八六）の『越前守綱昌公代年給帳』によった。

三藩を比較して明らかなことは、藩の石高が富山十万、金沢一〇二万、福井三十二万の割合と医師数の比率が余りにも異なるのである。しかも福井藩の最高禄は七百石と幕府並みである。そのためか貞享三年内に改革（いわゆる貞享の半知）最高禄は他藩並みの二百石となっている。富山藩が比較的多いのは二代富山藩主前田正甫が病弱で医療を重視したあらわれかもしれない。

富山藩

○入江権兵衛支配

五拾人扶持　杏一洞（長崎外科）
近習医師

貳百石　興津里庵
伯番医師

三拾人扶持　横井済安
同右

三拾人扶持　岩城仙庵
同右

四拾五人扶持　茂野一庵（長崎外科）
外科

三拾人扶持　神田玄得

拾人扶持　南部寿碩

百石　赤尾正悦
御近習鍼医

百五十石　野中丹室

○組外　河村弥三右衛門組

百石　村山為優
外科

三十五俵　赤尾正悦
鍼医兼茶道

三十五俵　浅井寿卜
鍼医

五人扶持　三沢玄庵
在江戸

（以上13名）

金沢藩

貳百石　堀部養叔
組外医師

貳百石　坂井寿庵
同右

貳百石　加藤正悦
同右

貳百石　高田祐庵
同右

貳百石　小瀬甫庵
同右書物奉行

貳百石　山脇玄悦
組外医師

貳百石　富山周甫
同右外科

百五拾石　佐々快安
組外医師

百五拾石　堀部養佐
同右

百五拾石　藤田玄碩
同右

百五拾石　不破養伯
組外外科

百五拾石　堀　宗叔
同右

百五拾石　名倉幸春
同右

百五拾石　能勢玄竹
同右

百五拾石　矢田周閑
同右

百石　内山覚仲
組外医師

百石　久保寿斉
組外鍼科

福井藩

七百石　半井為竹

七百石　伊藤宗恕

三百石　野治恕謙

三百石　山崎道仙

三百石　有賀玄的

三百石　岡部高伯

二百石　横井玄節

二百石　井上養圃

二百石　平野玄察

二百石　黒子道佑

二百石　塩間丈宅

三百石　粟崎道喜

二百石　小川寿健

百五拾石　瓜生玄浄

百石　本宮祐節

二百石　有賀寿閑

二百石　安見寿碩

（以上17名）

百石 組外歯医師	江間 竹林坊
拾人扶持 組外医師	佐々 玄養
四百俵 大阪着米 組外医師	大石 三折
三百俵 同右	亨徳院 法眼
六拾俵 組外歯医師	江間 慶嘉
小判五拾両 組外外科	生田 丈仙
黄金五枚 医師	大知坊 法橋

（以上24名）

近世前期の北陸医学史で特筆すべきは、薬物の開発である。それも富山藩二代藩主前田正甫（一六四九―一七〇六）と金沢藩五代藩主前田綱紀（一六四三―一七二四）の二名君の功績であった。同時代性の史的意義を強調したい。世に前田正甫は反魂丹の創始者で、富山売薬[註(一八)]の開祖といわれるが、当時の藩財政の窮乏を救う一策もさることながら、日本の医薬文化史上からみても最大の事跡を残したといえる。すなわち、藩内外の諸学者を招き、藩主自ら本草学を学び、試用している。反魂丹などの富山の売薬は、この進歩した現代医学の時代になんの価値があるかと軽べつされるむきもあるが、その処方内容と効用を知る人は少ない。また配置薬の制度は、能登石動山、天平寺の知識廻りに端を発し、他国の情報蒐集に役立っただけでなく、医史学的には巡業者の記録は日本各地の大衆の医療状況を知る貴重な資料とされている。この配置売薬によって富山県の薬業は盛んになり、地域産業を特徴づけ、現在の富山医科薬科大学和漢診療部誕生の淵原をなした。

金沢藩の前田綱紀松雲公の功績は偉大である。その伝記は近藤盤雄『加賀松雲公』一九〇九（明治四十二年）全三巻、二二五三頁をご覧願いたい。前田綱紀は幕藩体制下の外様大名筆頭として保身政策を文化事業の振興に尽した。ここに、日

本の医史学で地域性を問題にする時、最大最高の具体的内容を提供することになる。日本中から優秀な学者を招聘し、書物を蒐集した。新井白石をして「天下の書府」と言わしめたことは有名である。現在でも東京駒場の尊経閣文庫や金沢市立図書館に膨大な典籍が保存され、今まで日本医史学会の諸先達多数の来訪をみたが、未知の世界が残されて居りこれからさらに同学の士の探究が待たれる。

まず近世本草家の系譜（図2）に示した通り、長崎と京都の二系統の本草家は金沢藩と密接な関係にある。『庖厨備用倭名本草』の著者向井元升[註(一九)]（一六〇九―一六七七）が金沢に招かれたのを始め、稲生若水[註(二〇)]（一六五五―一七一五）の求に応じて古今最大の博物書『庶物類纂』を編纂せしめた。向井元升の系統には貝原益軒や香月牛山が居り、稲生若水の門下はまさ

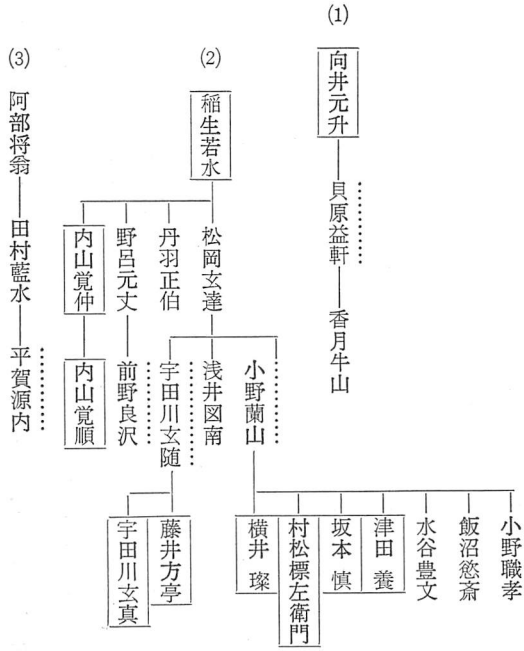

図2　近世本草家の系譜

に日本本草学の本流を形成した。松岡玄達を経て、『本草綱目啓蒙』の小野蘭山（一七二九―一八一〇）を生む。『本草綱目啓蒙』は『本草綱目』の単なる解説書ではなく、常に実地調査による独自の意見が記されている点、稲生若水の探求精神が流れている。幕府奥医師の望月鹿門（三英）は『庶物類纂』を評して、無用の長物としているが、稲生若水が北陸の身近に産する薬物を実際に踏査した上で、大著をものにしていることに注目しなければならない（『物産の儀御穿鑿稲若水言上書』『加能越所産薬種考』『加越能本草調』など）。『庶物類纂』著作の途上で稲若水は没したため、江戸幕府がこれを引継ぎ、丹羽正伯・野呂元丈・内山覚仲らの門下によって一千巻の完成をみた。内山覚仲[註二一]は覚中の後裔であるが、生歿年など不明な点もある。一方、小野蘭山の門下には金沢藩の人物が多い。異色なのは能登富木の農家村松標左衛門で、彼の著書や腊葉標本は石川県立歴史博物館・石川県立図書館に保存されている。

松岡玄達の門下に、著名な幕府蘭医宇田川玄随がいる。小浜藩医の中川淳庵も江戸で宇田川玄随らと本草品評会を開いたり、平賀源内の『物類品隲』を校訂した。金沢藩で最初の蘭方医学導入はこの玄随の子、宇田川玄真金沢への往診（一八〇八）が契機で、門下の俊秀藤井方亭[註二二]・吉田長淑[註二三]が金沢藩医になった。

藤井方亭・吉田長淑とも江戸詰（定府）の金沢藩医のため地元への思恵は少なかったと評されるが、参勤交代の体制下では江戸と金沢の文化交流が定期的になされたと考えるべきで、蘭学の北陸地域への普及を早めたり、金沢藩の高度の文化が常に江戸にもたらされたであろう。参勤交代の冗費は決して無駄でなかったと思われる。

蘭方医に触れたので、近世後期とりわけ激動の藩末維新期における北陸諸藩の名列を挙げ、全貌を検討しておきたい。

富山藩については安政七年（一八六〇）の『富山御家中分限帳』、金沢藩は文久初年（一八六一頃）の『加賀藩組分侍帳』、福井藩は嘉永五年（一八五二）『給帳』（松平文庫）を用いた。

近世末期の北陸諸藩医名列

〈富山藩〉

○御医者　林太仲　小塚将監　支配

拾五人扶持	本導　御七	山本道叔	五十八
三拾人扶持	本導　御七	真田見竜	四十八
百拾石	小児医　御七　本導兼而	木村東詮	四十九
拾八人扶持	御鍼　本導兼而	織田寿三	四十九
八人扶持	小児医　大殿様御前様御七　本導兼而	佐久間東庵	四十七
九拾石	大殿様御前様御鍼　本導兼而	辻　意川	五十
拾人扶持　銀五枚	右同断	浅井寿卜	四十七
七拾石	右同断	江尻友泊	二十五
百弐拾石	本導　鍼医兼而	杏　一貞	五十六
弐拾人扶持	外科　本導兼而	弘中自貞	四十九
拾人扶持	本導	奥津里庵	五十
拾人扶持	外科　本導兼而	関口鑌栄	三十四
拾人扶持	本導	須賀安碩	四十五
拾人扶持		井口玄珠	四十六
拾五人扶持		山本養琢	五十七
七人扶持	小児医　本導兼而	江尻春達	六十一
七人扶持	外科　本導兼而	堀　礼蔵	六十

三拾人扶持　歯医　本導兼而　岡嶋喜済　三十九
七人扶持　本導　鍼医兼而　渡辺文伯　三十九
拾人扶持　鍼医　本導兼而　浅井寿達　三十五
拾人扶持　右同断　吉田賢作　二十四
六人扶持　本導　横地元丈　四十二
拾人扶持　同　岡田専達　三十一
拾五人扶持　同　大野玄格　三十八
九人扶持　外科　本導兼而　村山意慶　三十
七人扶持　本導　井口宗貞　三十五
七人扶持　同　中田東軒　三十
拾弐人扶持　鍼医　本導兼而　小泉三悦　二十八
七拾石　本導　野中丹室　六十一
弐拾人扶持　眼科　本導兼而　島林英叔　二十八
拾人扶持　小児医　本導兼而　高野順庵　三十六
八拾石　久保三貞　一十五
七人扶持　外科　本導兼而　広瀬栄山　三十二
拾三人扶持　鍼医　本導兼而　小山寿泉　二十七
八人扶持　和田順泰　二十二
拾人扶持　岡本三虎　三十三

○新番御歩行　内田数馬
堀江権馬組

五人扶持　本導　高山調琢　四十一
五人扶持　外科　松本祐専　三十二

弐拾俵　眼科　岡本了達　三十三
五人扶持　外科　八木一徳　五十七
五人扶持　外科　西野了珉　三十五
六人扶持　本導　鈴木安之助　二十六
六人扶持　本導　高柳玄道　四十三
（以上御茶導方を除く四十三名）

〈金沢藩〉

寺社奉行支配

○御医者

三百石　横井元中惟一　桶丁広昌寺
三百石　森元周　味噌蔵心蓮社
二百五十石　大高元俊厚馨　江戸在住浅草竜福寺
二百石　江間三折　十間町薮ノ内
二百石　藤井方朔一　江戸在住浅草唯念寺
百八十石　中野通庵　堅町正福寺
百七十石　片山君平遠　百々女木町長周寺
百五十石　大庭探元　大蓮寺
百五十石　内藤宗安敦　右衛門橋下高岡妙国寺
百五十石　加藤駒六郎　西丁本光寺
百五十石　丸山了橘応方　堤丁後光覚寺

百五十石	大津　道順	長元寺
百三十石	黒川良安　弼	河原町 養照寺
百二十石	高島正顕吉彰	堅町 極楽寺
百石	吉益西州政成	国泰寺
百石	小瀬貞安良知	下堤丁 普明院
百石	賀来元貞惟政	材木町六丁目 長久寺
五十石	中野随安　達	竪町 正福寺
卅五人扶持	鮭延良節義行	江戸在住 本郷善福寺
廿五人扶持	吉田享庵成美	江戸在住 駒込養源寺
二十人扶持　外科兼帯	森　良斉　徳	十間町 開禅寺
十五人扶持　外科兼帯	八十島祥庵含	彦三四 西養寺
十二人扶持	魚住道庵　淵	堅町 心蓮社
十二人扶持	白崎　亥水	上近江町 善福寺
十二人扶持	石黒　春次郎	西丁 専光寺
十人扶持	池田亥昌秀実	宗叔丁 弘願寺
十人扶持	佐々正益敏政	高岡町 本是寺
十人扶持	高木学純翼之	西丁石黒方 妙泰寺
十人扶持	津田淳三正秋	馬場 了願寺
十人扶持	鈴木立白　珍	堤丁後口 仰西寺

十人扶持　不破良白　剛　蛤坂全昌寺
十人扶持　高峰　元稑　石屋小路
十人扶持　築田　益庵　博労町大聖寺久法寺
七人扶持　高島　正平
五人扶持　端　丈吉晴貫　小立野与力町村方高岸寺
五人扶持　南部　順元　袋町国泰寺
五人扶持　藤田道乙陳平　塩屋町専光寺
五人扶持　松田三順永従　上今町大乗寺

○御外科

百五十石　本道兼帯　長谷川学方茂求　彦三二河角干手院
二十人扶持　本道兼帯　黒川　良平　大工町善徳寺
二十人扶持　藤井全貞保祐　江戸在住駒込円通寺
十五人扶持　今井元昌義兼　御門前町西方寺
十人扶持　堀　宗太郎　堤丁後口妙慶寺
八人扶持　馬場　玄二　江戸在住貝塚青松寺
七人扶持　長谷川有方郁
五人扶持　本導兼帯　下田玄丹美啓　羽咋郡徳蓮寺

○御鍼立

二百五十石　久保三柳吉晴　彦三七極楽寺

百五十石　本道兼帯　二木順孝信重　方川荒町高岸寺
百五十石　本道兼帯　桜井了元直寛　高岡町宝勝寺
百石　久保定三直方　彦三五極楽寺
二十人扶持　松島瑞碩全美　江戸在住浅草法福寺
十五人扶持　外科兼帯　小川玄沢　膽　古寺町専光寺
十人扶持　横井　祥伯　宗徳寺
十人扶持　関　伴良　野町五丁目報恩寺
十人扶持　徳田　文仲　白銀丁妙法寺

○御眼科

十七人扶持　河合円斉知和　彦三八光教寺
十人扶持　堀　大庵　中村友圃越中普願寺
五人扶持　佐々木宗庵尚礼　京都在住浄福寺

○御口科

十人扶持　本導兼帯　江間順道　成　上堤丁後口棟岳寺

○御合力米

二百俵　亨徳院　常昭　京都在住十念寺

（以上六十名）

〈福　井　藩〉

匙医師

百石　岩佐玄珪
二百石　田代万貞
五人扶持百五十石　半井仲庵
百石　加藤道庵
百石　奥鍼医師兼　勝沢一順
百石　細井玄養
三十人扶持　村上三悦

奥医師

二百石　舟岡周斎
百五十石　有賀道順
百五十石　山脇元恭
百五十石　三崎宗庵
百五十石　鍼医師兼　岡部高伯
十人扶持　内海桃仙
十人扶持　鍼医師本道兼　定江戸　佐藤適斎
五人扶持　鍼医師兼　上田万順
五人扶持　切米二十五石　田代道玄
七人扶持　花木馨助

表医師

二百石　益田長庵
百石　細井玄春
百石　平野良庵

百石　引間正順
百石　浅野恭斎
百石　辻岡東庵
百石　馬淵玄仙

十人扶持　定江戸　針谷玄春

五人扶持　定江戸　千種宗伯

四人扶持　切米二十石　前波道巴

十人扶持　山田良達

五人扶持　定江戸　高橋元亭

奥鍼医師

百石　榎並孝斎

百石　本山城益

五人扶持　佐々木悌全

表鍼医師

百石　吉田仙庵

目医師

百石　奥　山本正伯

外科

五人扶持　切米二十五石　奥　妻木元真

十五人扶持　奥　栗崎道伯

四人扶持　切米二十三石　片山泰逸
五人扶持　切米二十五石　橋本左内
二十人持　長尾順庵
三人扶持　切米十五石　外科本道兼　大橋玄樹
十人扶持　定江戸　坪井信良
（以上四十一名）

ここに掲げた藩医のほかに、若狭・大野・武生・大聖寺などの北陸諸藩に属する藩医や家老など高禄武士の御手医師、さらに町医師・村医師が存在したのである。

今後は地域民衆の立場から幕末維新期の近代化を見直してみる必要があるが、いままで典医や藩医が中心でその方面の医史学的研究は少なかった。田崎哲郎氏が指摘するように、各種の門人帳を手がかりにするのもよい。私は藩医の『先祖由緒帳』を調べる間に、多数の町医師や村医師を発掘することができた。北陸の藩医に関する第一級史料も『先祖由緒帳』であり、現存するものは約八割を占めている。

『侍帳』や『先祖由緒帳』を基本資料を含めて、今まで北陸近世に関する医史学諸先達の報文をまとめ私見を加えたい。

(1) 武生の奥村南山良竹（一六八六～一七六〇）。先祖は金沢藩士、漢方の吐法を復活した功績は有名であるが、門下に永富独嘯庵・山脇東門・荻野元凱・田中必大らがいたことは注目すべきである。山脇東門の父、荻野元凱の師は山脇東洋[註(二四)]である。山脇東洋は御典医で漢方の大家であったが、宝暦四年（一七五四）に刑屍解剖を行い『蔵志』を著した。以後、各地で解剖が盛んになったが、福井はとくに先進的で明和六年（一七六九）の半井彦・山室知将による解剖と『減鑑』から福井若狭藩医の杉田玄白の江戸骨が原腑分、ターヘルアナトミア翻訳[註(二五)]の完成へと続く一連の事蹟[註(二六)]は、わが北陸医史学の最も誇り

とするところである。

(2) 大野藩の雨森牛南宗真（〜一八一五）。名著『松蔭医談』（マツカゲイダン）[註(一七)]が知られているが、大野藩に蘭学が早くから栄えたのは彼の功績である。日韓交流に尽した雨森芳洲[註(一八)]、無二膏で有名な雨森良意（稲生若水門下）との三題噺は如何なるものであろうか。

(3) 華岡青洲門下と北陸。門人録によると、越中二十二名、能登五名、加賀五十五名、越前二十二名、若狭十名。内、著名な医家は高岡の館玄竜・石川良元、富山の西野大珉、金沢の長谷川学方[註(一九)]、南保玄隆、大聖寺の樫田順格、越前の石堂鼎（北陸で最初、一七九七）、橋本左内[註(二〇)]ら、まさに圧巻である。大聖寺出身の儒者太田錦城も華岡青洲の門下であった。

(4) 緒方洪庵門下と北陸。適々斎塾姓名録（緒方富雄『緒方洪庵伝』岩波書店、一九四二）で、北陸最初の門人、越前丸岡藩の橋本秀益以来、六十二名にのぼる。橋本左内の名もみえるが、嘉永元年（一八四八）入門した大聖寺藩の渡辺卯三郎[註(二一)]は塾頭となり、大きな功績を残した。

(5) 蘭医シーボルト門下と北陸。北陸で最初の国立金沢大学医学部の前身の金沢医学館を創設した黒川良安[註(二二)]は長崎にシーボルトを訪れたといわれるが、良安以前に北陸から多くの人々が長崎に留学している。なかでも大聖寺藩出身で、越前丸岡藩医を経て、幕府医師、法印となった滑川院竹内玄洞はシーボルト初期の門下で江戸お玉が池に安政五年（一八五九）、種痘所を開いた。

(6) 北陸における種痘の伝播[註(二三)]。WHOが天然痘撲滅宣言して以来、現代臨床的関心はなくなったが、人類最大の疫病として医史学的価値は今なお失われていない。北陸の種痘伝播に関しては正橋剛二氏らの詳報がある。北陸への伝播は越前福井藩の笠原良策の功績が大で、福井から金沢・富山、そして全国へとおよそ半年間に燎原の火の如く広まったという。

(7) 近代の医学教育や診療は、およそ種痘所から始まったと言ってよい。金沢大学医学部の前身の金沢医学館や富山、福井の医学所もすべて種痘所に起原する。

(8) 種痘所は養生所となり、医学所または医学校[註(二四)]へと発展するが、多くの患者を収容する近代的病院の開設は、江戸の小石川養生所に先だち、一五五六年にルイス・アルメイダによる府内病院についで、寛文十年（一六七〇）に前田綱紀が金沢に設けたお小屋[註(二五)]は窮民対象といえ、特筆に価する。また、能登志賀には北陸二番目の私立病院である明七病院ができたが、その開設者渡辺・伊藤両医師については、『加能画人集成』などが手がかりであった。同じ頃、金沢には漢方医が集誠病院や博済病院[註(二六)]を開設したが、徒労に終った感が深い。

(9) 医学館開設に伴い、始め外国人医師が庸われたり、外国へ北陸の医家が留学することとなる。ここで注目すべきは、北陸の場合も優秀な外国人医師であったこと、北陸では漢方から蘭方への交替より、オランダ医学からドイツ医学への転換の方があつれきが大きかったこと、黒川良安をめぐって、瑳珂寿安の日本初のシベリヤ横断と黒川誠一郎の法律家としてのフランス留学などが挙げられる。

(10) 高岡の長崎家、佐渡家[註(二七)]と坪井信道塾の関係も明治維新期の日本医史学の中心的話題である。坪井信道は一時期、福井藩にも招かれている。佐渡家に関する資料と蔵書は金沢市立図書館の蒼竜館文庫として保存されている。私は蒼竜館文庫や『国書総目録』（岩波）のお蔭で、全く不詳であった金沢藩筆頭俸禄（江戸在府）の大高元哲の著作業績[註(二八)]を知ることができた。これは単に金沢藩内にとどまらず、日本蘭学史上、かなりの反響を起すことになろう。

北陸近世医学史について未だ書き残したことが多い。小浜藩における林野家[註(二九)]など。また衛生・検査・看護・体育・民間療法なども割合せざるをえなかった。

六、結　語

北陸の医学史について、主として明治以前を概括した。古代と中世を比較的詳説してみた。近世以降に関しては、先達の報告論文が夥しい。主要かつ貴重な文献の記載に遺漏がないか、恐れる。その点、ご寛怒の上、ご教示を賜わりたい。

注（主として最近の引用文献を掲げた）

（一）橋本澄夫『北陸古代史』二四七―二四八頁、中日新聞北陸本社、金沢、一九七四（昭和49年）。『日本薬園史の研究』は一九七二（昭和47年）。復刻版（渡辺書店、東京）がある。

（二）『加能史料』奈良、平安Ⅰ、一八九―一九一頁、石川県、一九七九（昭和54年）。

（三）槙佐知子『全訳精解大同類聚方』平凡社、東京、一九八五（昭和60年）。畠山義範は不明で、義則（六代七尾城主）かもしれない。七尾城の近くに石動山があり、江戸時代に山岳修験道場の天平寺の山伏たちが北陸を勧進（知識廻り）の際に頒与した伊須流支の一本薬は『大同類聚方』または伴信友の『大同類聚方考』所載の「伊須流支薬、伊須流友比古命之方也」と諸書にみえるが、『校註大同類聚方』平凡社、東京、一九七九（昭和54年）、には見当らなかった。

（四）坂井豊作『鍼術秘要』全三巻、原屋茂兵衛、江戸、ほか四店、版本、一八六五（慶応元年）江戸時代最後の鍼術書である。富士川游は『日本医学史』の中で余り評価していないが、内容は横刺法や鍼術と薬物の併用療法など卓見が多い。坂井豊作は金沢藩御鍼立筆頭久保三柳の門下であり、後裔は大正時代大阪で薬局を開業したが、現在は不明である。

（五）杉立義一『医心方の伝来』思文閣出版、京都、一九九一（平成3年）。に詳しい記載がある。ほかに森潤三郎『多紀氏の事蹟』思文閣出版、京都、一九八五（昭和60年）、再版。森鷗外『渋江抽斎』『伊沢蘭軒』がある。

（六）高瀬重雄「平安時代の医家和気氏について」『北陸医史』七巻一号、三―八頁、一九八六（昭和61年）。氏のライフワークは和気氏と山岳信仰で、ほかに専門の論著が多数ある。

（七）土井順一「岡本一抱子年譜」『日本医史学雑誌』二十三巻四号、一九七七（昭和52年）。

（八）白崎昭一郎「今昔物語の中の医学（その一―五）」『北陸医史』一巻一号―七巻一号・九巻一号、一九八八（昭和63年）。

（九）加藤豊明『明治前の日本外科略史並びに藩政期の北陸外科について』金沢大学医学部第一外科教室同門会、一九八五（昭和60年）。金瘡医のほか、北陸近世、近代の医家に関する多数の報文がある。キリシタン関係にも詳しい。『北陸医史』『十全同窓会報』『石川医報』をみられたい。

（一〇）宮本義己「畠山義綱と医道伝受(一)」『『日本医史学雑誌』十八巻四号、二五八―二六九頁、一九七二（昭和47年）。

（一一）多留淳文「北陸における曲直瀬家の系譜」『北陸医史』五巻二号、七〇―七五頁、一九八四（昭和59年）。

（一二）竹内真一「南蛮外科栗崎家系譜と越前栗崎家について」『若越郷土研究』十四巻二号、二三―四〇頁、一九六九（昭和44年）。

（一三）加藤豊明「高山右近の後裔と噂されている能登「ジンザ医者」と南蛮外科栗崎道喜との相互関係の有無について」『北陸医史』

二巻一号、三五―三七頁、一九八〇（昭和55年）。

（四）岩治勇一「越前朝倉版「俗解八十一難経」の版木」『若越郷土研究』十九巻五号、八一―八五頁、一九七四（昭和49年）。同右「越前版「俗解八十難経」の異版について」『北陸医史』十巻一号、一九八九（平成元年）。ほかに谷野一柏に関して『福井県医師会だより』に数報掲載されている。

（五）寺畑喜朔・江間冨喜子「加賀藩医江間三吉と系譜」『石川郷土史学会会誌』二十三号、七―十三頁、一九九〇（平成2年）。

（六）加藤豊明「加賀藩に来仕した小瀬甫庵とその後裔」『北陸医史』五巻二号、四七―六八頁、一九八四（昭和59年）。

（七）加藤豊明「加賀藩々医南保家文書「金瘡療治之事」及び「岩崎療治」「薬」について」北陸医史、三巻一号、二三―二五頁、一九八一（昭和56年）。

同右「加賀藩医南保家々藩並に南保玄隆について（補遺）」『北陸医史』四巻一号、三六―三七頁、一九八二（昭和57年）。

（八）宗田一『日本の名薬売薬の文化誌』四八―五八頁、八坂書房、東京、一九八一（昭和56年）。

玉川しんめい『反魂丹の文化史』二七七―二八〇頁、晶文社、一九七九（昭和54年）、に文献が掲げられている。

（九）難波恒雄「向井元升とその家族たち」『庖厨備用倭名本草』一―十五頁、漢方文献刊行会、大阪、一九七八（昭和53年）。難波教授はこの種の貴重な漢方文献を多数復刻解説されている。

加藤豊明「向井元升著「庖厨備用倭名本草」について」『北陸医史』七巻一号、一四―二六頁、一九八六（昭和61年）。

（一〇）矢部一郎『江戸の本草　薬物学と博物学』六六―七一頁、サイエンス社、一九八四（昭和59年）。東京関係文献が巻末に要領よく掲載されている。

（一一）加藤豊明「内山覚順（覚仲）と稲生宣義（若水）」『北陸医史』四巻一号、三七―三九頁、一九八二（昭和57年）。近年、科学書院から『庶物類纂』の復刻をみた。

（一二）藤井亭己「杵築藩医佐野家遺文集と藤井方亭」『日本医史学雑誌』十二巻四号、七七―九六頁、一九六六（昭和41年）。加藤豊明「加賀藩に来仕した宇田川玄真の高弟藤井方亭とその子孫」『北陸医史』九巻一号、五八―六六頁、一九八八（昭和63年）。

（一三）津田進三「吉田長淑とその学統」『日本医史学雑誌』三十巻二号、一一九―一二一頁、一九八四（昭和59年）。

（一四）松田健史、正橋剛二「山脇東洋の位牌について」『北陸医史』一巻一号、二二頁、一九七九（昭和54年）。「補遺」は同誌、三巻一号、二七―二八頁、一九八一（昭和56年）。

（一五）酒井恒「いわゆるターヘル・アナトミアの脚註について」『日本医史学雑誌』三十巻二号、一三〇―一三七頁、一九八四（昭

和59年)。酒井教授には『ターヘルアナトミアと解体新書』全七六一頁、名古屋大学出版会、一九八六(昭和61年)、の労作がある。

(二六) 寺畑喜朔「北陸の解剖略史」『日本医史学雑誌』三十四巻二号、一八七—二〇一頁、一九八八(昭和63年)。同「補遺」は『北陸医史』一〇巻一号、五七—六二頁、一九八九(平成元年)。

(二七) 岩治勇一「松蔭医談について」『北陸医史』八巻一号、四〇—四二頁、一九八七(昭和62年)。

(二八) 上垣外憲一『雨森芳洲』中公新書、一九八九(昭和64年)。

(二九) 長谷川昭「御典医長谷川家について」『石川郷土史学会会誌』第二十一号、七五—八二頁、一九八八(昭和63年)。

(三〇) 白崎昭一郎「医師としての橋本左内」『北陸医史』十巻一号、一一—二六頁、一九八九(平成元年)。

(三一) 加藤豊明「大聖寺藩不世出の蘭方医渡辺卯三郎の生涯」『北陸医史』四巻一号、一九八二(昭和57年)。

(三二) 津田進三「黒川良安について」『石川郷土史学会会誌』第七号、八七—九五頁、一九七四(昭和49年)、黒川良安については、『北陸医史』十二巻一号、一九九一(平成3年)が特集しているので他の文献を省略した。

津田進三「金沢地方における種痘伝播について」『日本医史学雑誌』十四巻一号、三五—三六頁、一九六八(昭和43)年。

(三三) 白崎昭一郎「幕末における種痘の歩み」『日本の科学と技術』第二〇三号、一九八〇(昭和55年)。

正橋剛二・松田健史「牛痘法の北陸地方への普及について(第一報)」『北陸医史』五巻二号、二三—三三頁、一九八四(昭和59年)。第二報、第三報、同誌六巻一号、七巻一号にあり。

(三四) 文部省『日本教育史資料』全九巻、一九〇三(明治36年)石川県立図書館蔵。

(三五) 加藤豊明「加賀藩笠舞村撫育所と財団法人小野慈善院について」『北陸医史』十一巻一号、二九—三七頁、一九九〇(平成2年)。

(三六) 多留淳文「北陸における浅田宗伯の門流—佐々木秀三郎の事績」『漢方の臨床』三十七巻九号、六八—八〇頁、一九九〇(平成2年)。

(三七) 津田進三「長崎浩斎著『浩斎医話』について」『日本医史学雑誌』三十四巻二号、二一七—二三一頁、一九八八(昭和63年)。

寺畑喜朔「佐渡家の阿波加脩造について」『北陸医史』十一巻一号、一九九〇(平成2年)。

加藤豊明「坪井信良(旧姓佐渡良益)年譜」『北陸医史』十二巻一号、一九九一(平成3年)。

東京大学明治維新史料研究会『幕末維新風雲通信』東京大学出版会、一九七八(昭和53年)。木々康子『蒼龍の系譜』筑摩書

房、一九七六（昭和51年）など。

(三八) 大高元哲（訳）『三材韻府標目』刊年不詳、尊経閣文庫所蔵。（未見）

(三九) 田辺賀啓「小浜藩における林野家（小石元俊の祖）の事蹟について」『日本医史学雑誌』二十二巻二号、一九七六（昭和51年）。

主要参考文献（各県別の綜説的なものを掲げた）

＜富山県＞

(1) 飛見丈繁『越中医薬史談』自刊、高岡、一九四七（昭和22年）。謄写刷、全二〇〇頁。

(2) 飛見丈繁『越中医薬史』月刊、高岡、一九四九（昭和24年）。右書の活字印刷版。

(3) 飛見丈繁『越中の近世医家』自刊、高岡、一九六六（昭和41年）。

(4) 『富山市医師会五十年史』富山市医師会、一九五八（昭和33年）。

(5) 篠田義成『氷見の医師たち』自刊、氷見、一九七〇（昭和45年）。

(6) 中川喜久江「富山藩医学史」『富山史壇』50・51合併号、一二九―一四四頁、一九七一（昭和46年）。

(7) 難波恒雄「富山藩の薬業と本草（要旨）」『日本医史学会雑誌』、二十二巻二号、一〇一―一〇三頁、一九七六（昭和51年）。

(8) 館秀夫「富山県の医史」『とやま医報』七五五号、富山県医師会、一九七九（昭和54年）。

(9) 館秀夫「富山県の医の歴史を訪ねて」『北陸医史』四巻一号、六―一四頁、一九八二（昭和57年）。

＜石川県＞

(10) 藤本純吉編『石川県医学沿革記』金沢市立図書館蔵、編年不詳。後半に「石川県医学発達史」が合録されている。

(11) 飯森益太郎『石川県医学沿革史』一九一四（大正3年）。金沢市立図書館蔵、新聞の切抜き。

(12) 石川県教育会金沢支会編『金沢市教育史稿』一九一九（大正8年）。復刻版、第一書房、東京、一九八二（昭和57年）。後篇四〇五―六七五頁）は学芸人物誌。藤本純吉編『石川県医学沿革史』の方は本書前編の第十章、医学校（二九七―三一五頁）の部分を筆写したもの。(10)(11)(12) はいずれも幕末維新以後について記載されている。

(13) 『金沢市医師会医政史』金沢市医師会、一九四三（昭和18年）。全八五三頁。

(14) 松本三都正『石川県医事年表』（右記『金沢市医師会医政史』附録の抜刷）。

(15) 津田進三「郷土の医学史のあれこれ(1)―(15)」『石川医報』三〇六―三八〇号、一九六四（昭和39年）。
(16) 三浦孝次『加賀藩の秘薬』石川県薬剤師協会、一九六七（昭和42年）、全三九六頁。
(17)『石川県医事年表』石川県医師会、一九六九（昭和44年）。、明治以後の記録。
(18)『石川県医師会二十年史』石川県医師会、一九七三（昭和48年）。全三四八頁。
(19) 津田進三「江戸時代における石川県医学史」『日本医史学雑誌』二十二巻二号、九五―一〇〇頁、一九七六（昭和51年）。

＜福井県＞

(13)『若越医談』若越医学会、一九〇五（明治38年）。
(14) 笹岡芳名『越藩福井医史及医人伝』三秀舎、東京、一九二一（大正10年）。
(15) 向井定一編『敦賀医学史考』敦賀市医師会、一九六四（昭和39年）。全八三頁。
(16)『今立郡医学史』今立郡医師会、一九六七（昭和42年）。全一二二頁。
(17) 向井定一編『若狭医療史』小浜市・三方郡・大飯郡・敦賀市の嶺南部地区医師会、一九六七（昭和42年）。
(18)『武生医師会誌』武生医師会、一九六七（昭和42年）。全三七七頁。
(19)『福井県医学史』福井県医師会、一九六八（昭和43年）。全一〇一一頁。
(20) 松田武「福井県医学史」『医学史研究』三一号、一九六九（昭和44年）。
(21) 宇野松雄編『敦賀市医師会史』敦賀市医師会、一九八〇（昭和55年）。全九六二頁。

＜その他＞

(22)「北陸医薬業史」『北陸医薬業名鑑』一―八四頁、北信医事新聞社、金沢、一九五〇（昭和25年）。
(23)『金沢大学医学部百年史』金沢大学医学部創立百年記念会、一九七二（昭和47年）。全七九六頁。
(24)『北陸医史』北陸医史学同好会、一巻一号、（昭和54年）。以後年一―二回発行。現在、通巻十三号まで。
(25) 小林保正「近世医学第一線の越前人・若狭人」『北陸医史』三巻一号、一九七一（昭和56年）。
(26)『武生医師会百年史』武生市医師会、一九八八（昭和63年）。全六五四頁。

＜石川県金沢市・多留内科クリニック＞

A history of medicine in the Hokuriku district

by Atsfumi TARU

This article is a review of the history of medicine in the Hokuriku district.

Until the modern age, the Hokuriku district was an entrance for the importing of cultures from the Chinese continent. Characteristics of this district are continuity but separtion with mountains between it and the Capital, this district has been called "Koshi" (cross-over land) Despite its heavy snowfall and cold, it has abandant products due to its topography.

In ancient times, the Hokuriku district supplied many crude drugs to the Court, and carried on retations with it through the palace doctors Nakarai and Tanba.

In the middle ages, new Buddhism prospered in the Hokuriku district, and Buddhist doctors publised medical books such as "Nan-ching" early.

In the Edo period, the chief of the Kanazawa clan, an outside dâimyo, promoted a culture policy and collected a great amount of literature and such. Consequently, medicine in the Hokuriku district developed, and hastened the acceptance of modern western medicine.